幼児専用はさみの設計

香川敦子

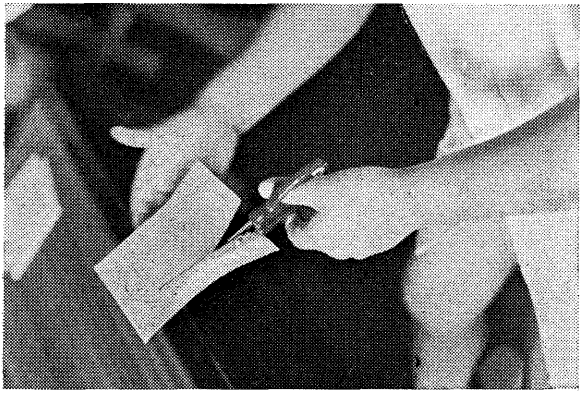
私たちは幼児と道具との出会いに興味を持った。大脳の「出先機関」といわれる手は、もみじのように可愛らしく、その大脳に各種の回路が超スピードで組立てられているのを「出先機関」として象徴するごとく、微妙に各指の協調作業は進歩していく。おしゃぶり、がらがら、スプーンは、幼児にとっての道具であろう。

私たちはもう少し高度のものとしてはさみを考えた。三歳児は、幼稚園に入園するまで、家では、はさみの使用経験のないものも多い。私たちはその出合いをみた。従来の幼稚園用といわれるはさみを初めて持つとき、第一の難関はハンドル部分(指輪)と指のマッチした関係である。片方に母指、他方に人指指を入れると、大体指のつけねまで入ってしまう。一度、試みにそのような状態に御自分の指をはさみに入れてみていただきたい。いくら指を動かしてみてもハンドル部分は動かず、従って刃は開きも閉じもしないし、紙は切れない。

母指が斜にさしこまれて固定できるとか、人指指、中指の二本をさしこむので固定できるとかいう場合に、左手は紙を水平に保ち、はさみの刃はそれに垂直に開閉することができるので、はさみは連続的に切りすすむようになる。私たちはこれを、はさみの使い方の定形と思うが、幼児は屢々はさみを水平に、紙を垂直にして切る。これが第二の難関にもかかわるのであるが、体に対するはさみと、紙と左手の位置関係を安定させ、左右の手の動きを協調させることのむつかしさである。私たちは、プッ

ンプツンと断続するのではなく、ある方向に連続的に切りすすむことができる、というあたりを、幼児に到達させたい技術と考えた。

この、体に対する位置と、左右の手の協調となると、「大脳の出先機関」の手だけの問題ではなく、どうやら大脳そのものの「心」につよくかかわることも、はさみと幼児を通して知った興味あることであった。三歳児保育の原点となる母子分離が、果実の熟するごとく、花の蕾の開くごとく自然に成立している場合は問題がないのであるが、その経過に渋滞があると、不思議にこうしたはさみに対するトータルな対応ができにくい。例えば、紙が刃にはさまってしまったり、手の位置が体にかたく接近して自由に動かなかったりする。三歳児の一年間に間隔をおいて色紙に画いた円の線を切りとるということを数回してもらって、習熟の過程を追ったので、こうした例が、ある場合には母子分離が完成すると共にまろやかな線で円が切りとれるようになるということをみた。



私たちは小さな手指を、指の厚みや、幅などあれこれ計測してみた。従来の幼稚園用はさみのハンドル部分は、どう考えても幅がひろい。それで、薄い朴の板に指を入れ穴（指輪）の設計図をかいて切りとり、同形のもの二枚ではさみの刃の金属部分の基をはさんで接着剤で固定した。穴の内面に波形の凹凸をつけて、指が保持しやすいようにしたり、ラシャばさみにみられる「まねき」（母指輪に指にそうような傾斜をつける）をつけたり、いろいろと細かな試みをもりこんで幾種類も試作し、幼児につかわせて観察した。途中から岐阜県関市の川島工業というはさみのメーカーの協力を得て、一応市販できる完成品をつくった。川島工業では、その可愛いい赤いハンドルのはさみに「ちょっきんな」と名前をつけている。

二歳くらいの小さな手には、なお大きすぎ、大きな手の幼児には、使い終ったときちょっと指がぬけにくかったり、難点はある。道具に対する適応の修練こそ技術の基

礎であるのに、そのような特別なはさみを与えることは過保護であるという批判もある。たしかにそういう面もあるけれども、「今まではさみが苦手だった子が、これを使わせてからはさみが大好きになりました」という母親の声、「どっちが使いやすい？」（従来のものと）ときくと、「こっち」と得意気に新製品をさす幼児の顔に接すると、あってもよいものだという自信をもつ。

そして、母子分離のできにくい幼児に、手に合ったはさみで自由に切ることができるという（紙を円滑に切るという快感は、手先の快感だけではなく、大脳の支配する心の、ある種の自由の獲得であると思われるので）その心が、母親からの分離、自立して自由になるという心への橋わたしになることもあるのではないかと、ひそかに思うのである。

（姫路短期大学）

はさみ　切り紙　紙切り紙

原口純子

一、はさみ

ちかごろの子ども用のはさみは以前のものに比べてかなり良質の物が出まわっていることはよろこばしいことである。

指を通す穴も子どもの手の大きさに合っているし、刃のかみ合せもよいのでかなり不器用な子どもでも、はさみを手に持ち、紙をあてがえば切ることができる。刃の間に紙がすべり込んで切ることができないと